

中国歴史年表

新石器時代

長江文明 稲作農民と海洋民が混在 船の文化 儒教文化



前 8000 頃	八十丹遺跡	稻籼殼発見
前 7000 頃	彭頭山文化	稻作はじまる
前 5000 頃	河姆渡文化	稻作確立
前 3500 頃	良渚文化	
前 2500 頃	三星堆文化	



寧夏大麥地の絵文字（前 5000 頃）



新石器時代の地図

黄河文明 畑作農民と遊牧民が混在 馬の文化

丨 丨 | タ バ 1 1 ト T ^ X +

ミ ト 1 バ ナ ト ト ↑ バ X +

エ バ ハ ナ バ K ナ

前 9000 頃	裴季崗文化	粟作
前 4500 頃	仰韶文化（半坡陶文・彩陶）	



魚文盆彩陶 儀式用か

前 4300 頃	大汶口文化	かいとうそん （灰陶尊）
前 3100 頃	馬家窯文化	だいとうそん （灰陶尊）
前 2300 頃	龍山文化	かいとうそん （灰陶尊）



前 2100 頃 二里頭文化 中国最古の青銅器（青銅戈）



はろうもんへ ば かよう
波浪紋瓮（馬家窯）



刻画符合



丁公陶文（龍山文化晚期）

か

夏（前2070～前1600頃） 中国最初の王朝

帝王舜のもとで黄河の治水に成功した禹が舜の死後、諸侯に推举されて天子となり以後その位は世襲され17代つづいた（『史記』による）

黄河を制する者は天下を制する

治水は中国の宿命

青銅器鋳造技術確立

青銅器時代の始まり（大革命であった）

なんせんほくば　なんとうほくぞく　ほくじゅなんどう
「南船北馬」「南稻北粟」「北儒南道」



勢力地図（前2000頃）



勢力地図（前1600頃）

殷（商）（前1600～前1046）

二里岡文化（殷代初期）

夏の桀王は民を搾取し、家臣に暴虐をふるい、美人の妹喜を溺愛し贅沢に溺れたため政治は乱れ、民心は離れ、ついに夏の將軍であった商の湯に敗れ、追放され病死したと伝えられている。夏王朝を倒した湯は諸侯から推举されて商の王となり、商王朝を建てた。商は国事を天の神にゆだね、占いによって国を治めた。（神權政治）そのついのために亀甲獸骨が使われた。そこに書かれた文字が甲骨文字である。甲骨文字は、商代後半期（前1300頃～前1046頃）都を殷墟近くに遷してからの二百数十年間に使われていたらしい。商は鬼神



(孟)



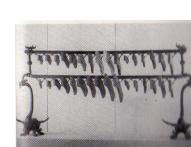
青銅器に銘文が現れる
(司母戊方鼎)



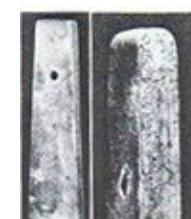
甲骨文字
(龜の腹甲)



甲骨文字
(肩甲骨)



編磬



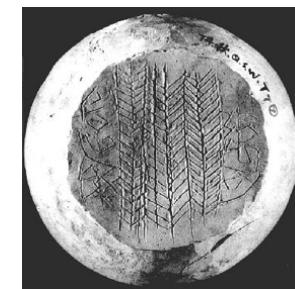
殷墟の婦好墓出土の石磬
(最古の石刻)



饕餮紋・雷紋



台西記号（陶器に刻されている）
甲骨文の臣・魚などにちかいもの
が見える。



呉城陶文

を信じ、天命には逆らえないので、占卜によって天意を知り、それに従うだけだと考えていた。初めは自然を神として祭っていたが、しだいに祖先を神として祭るようになった。一族の結束と王位の世襲を強固にするためと思われる。人々は酒を飲んで酔い神と一体になることを無上の喜びとした。異民族との戦争の絶えない国であった。捕虜を生贊や労働力にした。商王朝最後の第30代紂王は才能や体力に恵まれた美貌の王であったが、絶世の美女妲己を奪い取ってから妲己の関心をかうためか悪逆非道の暴君と化したと伝えられている。(酒池肉林)

殷周革命（商周易姓革命・殷周戦争）

殷の西方の周原に周という国が興った。周王古公亶父は慈悲深い王であったのでしだいに周辺諸国人望を集めていった。その孫の文王は渭水のほとりで太公望呂尚に出会い軍師として迎えた。多くの異民族が商の暴虐ぶりを文王に訴え、商の打倒を要請した。文王は商打倒を決意し、その決意は子の武王に継がれ、武王は軍師呂尚と共に牧野の戦いで商を破った。

前 1024 牧野の戦い

前 1023 紂王自殺 妲己武王に首を刎ねられる
商王朝滅亡



牛の肋骨で作られた「匕」(さじ)と「𠂇」(さく)という食器に刻された甲骨文。



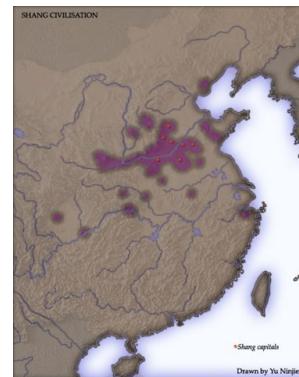
殷墟出土墨書陶片



墨で書かれた甲骨文字



甲骨文字と金文の「冊」
(「筆」の原字)



殷の領域図



獸面紋大鉢
(殷代後期・前1300頃)



酒器(殷代後期)
全体に饕餮文



太公望像

しゅう
周（前1023頃～前249）

せいしゅう
西周（前1046～前771）

殷代は鬼神の支配する国であったが、周代は人間が支配する国になった。人間の努力によって天命は改善できると考えた。（人間中心主義）天下は安定し处罚は40年以上も使われなかつた。天や先祖を祭るときには建物の大きさから演奏される音楽まで式次第が細かに定められていた。（「礼」の制度）周は秩序の整つた国であった。この時代を孔子は理想とした。青銅器には文章が書き込まれ、形に変化がみられる。各地に漢字が伝播する。

ほうけんせいど
周の封建制度

「封建」とは封土を分けて諸侯を建てるの意。周の「封建制度」とは一族・功臣・各地の首長を諸侯とし、公・侯・伯・子・男の五等に分け、この爵位に応じて封土（領地）を与える。軍役と貢納の義務を負わせる支配体制をいう。王は封土に邑（都市国家）を建設しその支配をまかした。その支配をまかされた者を諸侯という。（邑制国家）諸侯のもとには卿・大夫・士と呼ばれる世襲の家臣がいてそれぞれ封土を与えられ、その地の農民を支配した。士以上が貴族で支配者階級である。祖先神—周王（本家）—諸侯（分家）—卿・大夫・士（分家）というピラミッド型の支配体制であった。周に封じられた国は200にもなった。



大孟鼎（西周初期）



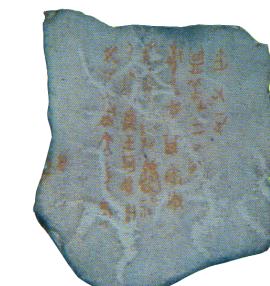
えいか
衛盉（西周中期）



そん
尊（酒器の一種）西周前期
きょうもん とうてつもん
上部に鳳文中央部に饕餮文下
きりゅもん 部に竜文を配し、その間を雷
文でうめている。



毛公鼎西周後期
(前827年頃?)



西周の甲骨文字

とうしゅう しゅんじゅうせんごくじだい
東周(前770～前256) 春秋戦国時代ともいう

前 771 第 12 代周王の幽王は絶世の美女褒姒を寵愛し政治をおろそかにした。その頃西北から異民族の犬戎が侵入し、また諸侯の攻撃を受け幽王は殺され褒姒は捕らえられ行方不明になり西周は滅びた。幽王の子の第 13 代周王平王は洛邑に遷都し、ここに東周が始まった。東周代は洛邑遷都から晋が三国に分裂するまでを春秋戦国時代、その後東周が滅び秦が中国を統一するまでを戦国時代という。この時代は鉄製農具が普及し生産力が向上し、200 の都市国家がいくつかの大団に併合される過程であった。

春秋時代 (前770～前403)

かいめい さくほう
会盟政治 (牛耳る) 東アジア冊封体制
はしや
霸者の出現 (春秋の五霸) 霸者を「公」と呼ぶ 実力主義の時代 古い秩序の崩壊と新時代の秩序と思想 「尊王攘夷」
「邑制国家」から「領域国家」へ
こうし
孔子 (前551～前479)

周の「礼」に帰ることで混乱の世を救おうとした。(徳治主義)
「孝」→「仁」→「礼」



(盟書) 石版や玉版に毛筆で朱を用いて書かれているものが多い。朱はもとは血であったとも言われている。

えつとうこうせん どうけん
越王勾践の銅劍

戦国時代（前403～前221）

リツリョウ（文書行政を支える法体系）の出現

「戦国の七雄」（秦・晋・宋・楚・呉・越・齊）

「下克上」

人々は宗教的ではなく合理的になる

鉄器時代（鉄の鋳造技術が始まる）鉄器が

農具として一般的に普及するようになった。

牛耕農法の発明

「矛盾」

商業の発展

貨幣経済の発展

手工業者の出現

人口50万人以上の世界的大都市の出現

封建制度の崩壊 土地の私有

大土地所有者である豪族の出現

春秋末から戦国時代にかけて、実力主義の風潮の中多くの思想家が現れ多くの書物が書かれ様ざまな学派が生まれた。これらを総称して「諸子百家」と呼ぶ。諸子の「子」は先生の意、「百」は多いの意、「家」は学派の意である。



古鏡（戦国時代）



刀銭（北方の齊・燕）



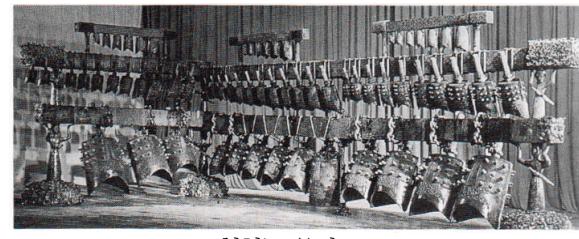
環銭（西方の秦）



布銭（中央部の趙、農具の形）



蟻鼻銭（南方の楚）



曾侯乙編鐘



金象嵌・鄂君啓節（楚・前323年）



曾侯乙墓竹簡（戦国前期・曾）



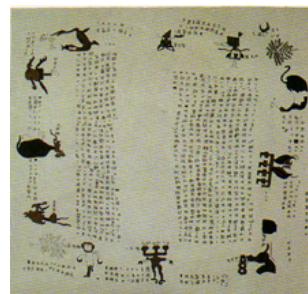
包山楚墓竹簡（戦国中期・楚）



戦国時代地図



石鼓文



そくしょ
楚帛書

諸子百家

儒家

孔子（前551～前479）

孟氏（前372頃～前289頃）「王道政治」「易姓革命」易姓は姓が易の意。革命は命（天命）が革の意。王朝の交替によって支配者の姓が変わる意（革命の由来）
禅讓という革命、放伐という革命。性善説

荀子（前298頃～前235）礼による社会秩序。王が民を教育することだと説く。法家に影響した。性惡説

墨家

墨子（前480頃～前390頃）

「兼愛」無差別平等の愛・人類愛を説く。「非攻」自衛のための戦争と軍備は認めたが、自分の方からは絶対に戦争を仕掛けない。反戦思想に発展。（墨家集団）儒家の「礼」を差別だと批判した。

道家

老子

庄子（前4世紀頃）

「老莊思想」自然のままの世界、対立や差別がなく、欲望や知から自由になり無心・無我となり、自然と一体になることが理想的な生き方であると説いた。（「無為自然」）柔軟でへりくだり、人と争わない心を持った少数の人々が住む社会を理想の社会とした。（「小国寡民」）「道」「無」

法家

韓非子（？～前223）李斯とともに荀子に学んだ。後に李斯に計られて自殺した。法律や刑罰を重視しそれによって悪人を取り締まらないと世は治まらないと説く。法家思想は始皇帝に採用されることになる。

その他兵家の孫子 縱横家の蘇秦・張儀 名家の公孫龍 陰陽家の鄒衍などが現れた。

文学作品

『詩經』中国最古の詩集。西周から春秋時代の歌謡を収録。孔子の編集と伝えられる。

『楚辭』戦国時代の楚の詩人屈原の詩を中心に戦国時代末に収録されたもの。

甲骨文字

商（殷）の後半期（武丁～帝辛（紂王）に至る二百数十年間）に使われていた最古の漢字と思われる。

王室での占卜結果を記したもの。王室以外の占卜結果を記したものや、暦、甲骨の保管、記念文などもある。

王の権威を立証するための記録が主である。殷代の文字とは王の神聖性を保証するためのものであり、王の判断の絶対的な正しさを証明するたに記録されたものである。約4500字が知られ約2000字が解読されている。

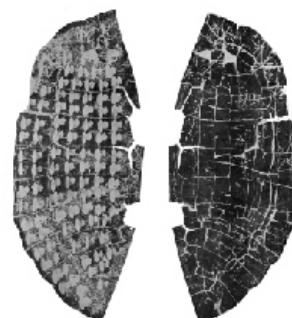
亀の腹甲、牛や鹿の肩甲骨、まれに鹿の角や人の頭蓋骨に筆で下書きしてから青銅刀や玉刀で刻したようである。

占文の内容は祭祀の時と方法が半数以上をしめている。その他狩猟の可否、風雨の予測などなんでも占卜によって決めていたようである。殷王は巫祝王であり、貞人という聖職者がいた。

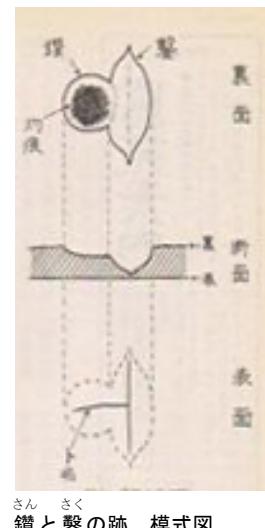
甲骨を焼いたあとのひび割れから吉凶、可否を読みとり、占いの結果を刻んだ。

漢字の祖先である理由は、漢字の造形原理（構造）の四法（象形・指事・形声・会意）が備わっているからである。

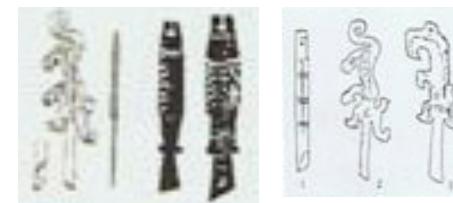
(注) 巫祝とは神につかえる者。
神事をつかさどる人。祝
(はふり)。巫女(ふじよ)
などの意。



亀の背甲の卜辞
左：裏、鑽鑿の跡。
右：卜辞（「甲骨文合集」より）



刀の刺さった甲骨



横線の彫られていない甲骨

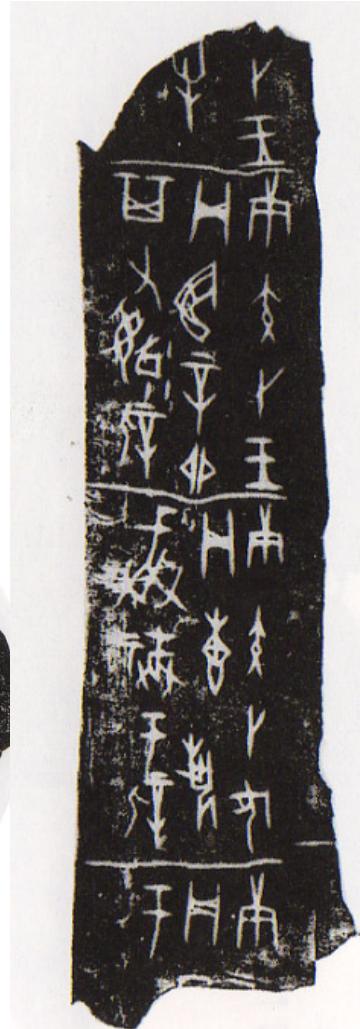
とうさくひん
董作賓による「五期区分」(五期断代法)により書風の変化を見てみよう。



第一期



第二期



第三期



第四期



第五期

たいてい 対貞（肯定と否定の一対で問う形式のこと）の例を読んでみよう。（甲骨文は必ず縦書きだが、左右のどちらの行から書き始めるかは一定していない。）

書式(多くは前辞と命辞だけである)

前辞	占いの日付・ト兆を象った文字・貞人名・貞問の行為
命辞	内容
占辞	王の下した判断
験辞	王の判断が実行された検証

ト辞
ト兆がトの字の字源



ひび割れを見てその形を占書で照らし合わせて判断したようである。ひび割れの裂け目を「兆」といいその順番がその裂け目のそばに刻してある。これを「兆序」という。焼き付けの順序を示した兆序は「兆序」とも呼ばれ、一から十まである。

亀甲ではト兆が左右ともに中央に向かうようになっている。ト辞は左右対称を重んじ左右対称でない文字は「反文」に書くことが多い。
(九・隹・年など) その他「上下を逆にする」(至など)、二字を一字のようにする(合文)など。

- ①貞う。惟れ帝は我がみのり 年をタタリするか。二月。
②貞う。惟れ帝は我が年をタタリせざるか。二告。
①と②の貞いを「ていじ 貞辞」という。



裏側に王の判断が書かれている。これを「占辞」という。
③王占いみて曰く、惟れ帝はタタリせず。惟れ吉なり。

ぼくしゅん
ト旬

じっかん
十干の甲から癸までの10日間を1サイクル（これを「旬」と呼ぶ）としてカレンダーにしていた。殷では干支は日をかぞえるのに使われた。



えと
千骨表（カレンダー）

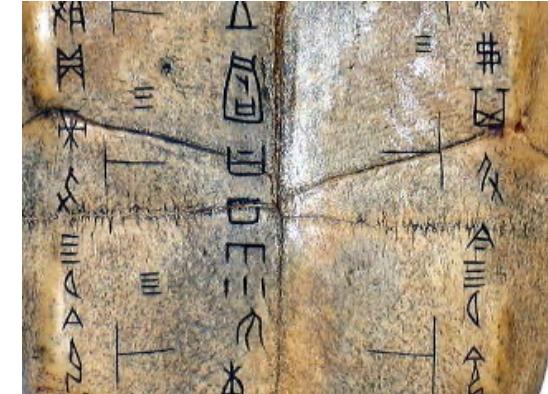
甲骨に書かれた干支表

干支表

1 甲子	2 乙丑	3 丙寅	4 丁卯	5 戊辰	6 己巳	7 庚午	8 辛未	9 壬申	10 癸酉
11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未
21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳
31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯
41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑
51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥



こしんりゆう
亀甲の中心（天里路と呼ばれる中央線）から左右対称に刻されている。



右側（否定文） 「帝は4月になつても雨を降らせないだろうか」

左側（肯定文） 「帝は4月になつたら雨を降らせるだろうか」

中央（占いの結果）「丁の日に雨が降るだろう、辛の日には雨が降らないだろう」

下部（実際の結果） 「王の判断どおり、丁の日に雨が降った」



馬



象



虎

龍	犬	豕	鹿	馬	羊
○	犬	豕	鹿	馬	羊
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○

甲骨文字

馬や犬、象、虎の字

甲骨文字の発見と研究

1899年 金石学に詳しい王懿栄と劉鶴（鉄雲）がマラリアの薬として購入した龍骨に彫られた文字を発見し、甲骨文字は突如として3000年の眠りから覚めたのである。

1903年 劉鶴は甲骨文字の拓本集『鐵雲藏龜』を出版して甲骨文字を世に広く紹介した。
羅振玉（1866～1940）は、河南省安陽県 小屯村の殷墟を発見し、甲骨文字解読の基礎を築いた。

王国維（1877～1927）古代史学の開拓者。殷代の王の系図を復元した。『史記』の殷本紀の系図が正しいことが分かった。殷墟出土の甲骨文字が殷代後期の物であることを実証した。

董作賓（1895～1963）は1928年から数度にわたって殷墟の発掘をした。貞人を発見し、甲骨文字を五期に分類し、「殷代研究」を創始した。
郭沫若（1892～1978）『甲骨文合集』の監修。

約十六万片の甲骨が発見され、文字数約4500字うち解読されたもの約2000字。

誰が何のために書いたのか。

誰が読んだのか。



劉鶴



『鐵雲藏龜』



羅振玉



王国維



董作賓

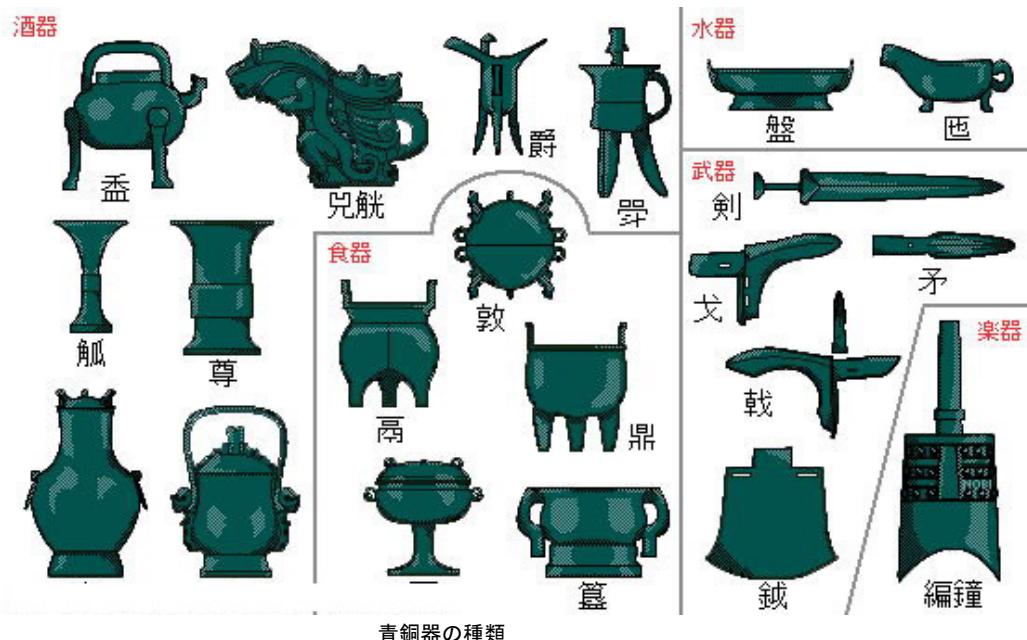


郭沫若

きんぶん 金文

金は金属のことで青銅の意、文は文字の意で、青銅器に鋳刻された文字のこと。殷代から漢代までに製作された物をいうが、青銅器は夏代（全21世紀）にすでに製作されていたようである。初期の物は饕餮紋や雷紋などの紋様だけであったが殷代半ばから銘文がみられるようになる。初めは^{ちゅうめい}鋳銘金文だけであったが、春秋時代以降、鉄器の^{たがね}鑄による刻銘金文が製作された。殷末から西周までが最盛期である。西周代は礼の社会である、出来事を永く世に伝えるために長い銘文が多くなった。春秋戦国にかけて祭祀用酒器から水器、楽器、食器、農具、貨幣、武器など、さまざまなものに使われた。しかし戦国時代から秦漢時代に鉄器が普及し、しだいに青銅器時代は終焉を迎える。

甲骨文字と違って金文は、漢代から殷周青銅器が出土して、宋代から金石学として本格的な研究が始まった。



金文は、以下のように便宜的に時代別に分類される。

殷代金文（前14世紀頃～）

^{ずしょくめい}圖象銘（マークのようなものか？）

^{せいぶんめい}成文銘（殷代末に多い）

西周金文（前11世紀～前771）

金文銘の黄金時代。長文になる。主君からの賜物、君主の命令、家族の記念、契約など。

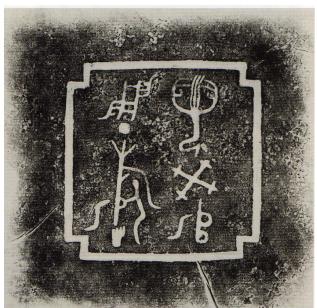
東周金文（前770～前222）

^{れっこう}列国金文ともいう。周王室から離れて地方色が表れるようになる。

秦漢金文（前221～紀元219）

青銅器時代から鉄器時代へ。

殷代金文（文字または記号は1～20字程度）



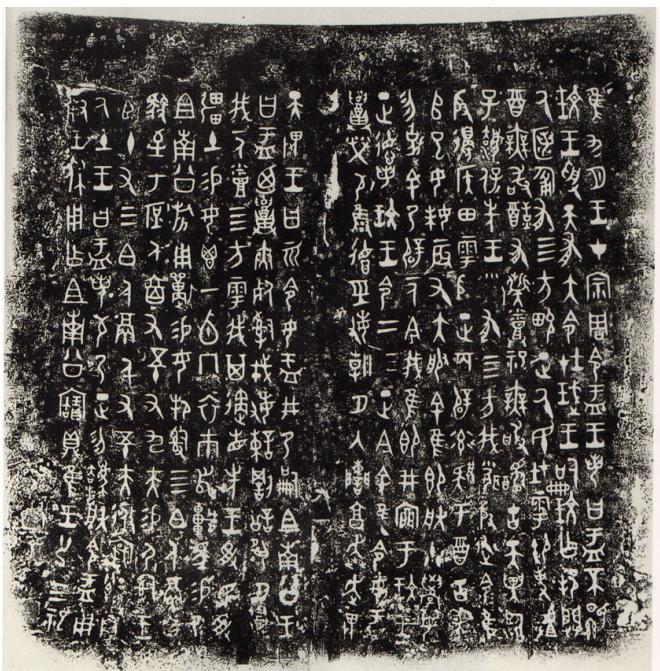
孟 図象銘（何かのマークか？）



しほばうてい
司母戊方鼎
高さ 133 cm、重さ 875kg.
内壁に「司母戊」の銘文。
ぶんてい
王文丁が母を祭るために
鋳造したらしい。



西周金文（記念品的なものが多い。神々が人間の運命を決めた時代は去り、人間が自らの意思で生きる社会が訪れた。）



大盂鼎（西周初期）

内容は周が殷を倒すに至った理由が述べられている。291字。重さ 150 kg 以上。
殷が天命を失ったのは、殷の諸侯や役人が酒に耽り、軍の統率を疎かにしたためである。よって周は文王が天命を受け、武王が後を継いで殷を滅ぼした。
「肥筆」「波磔」



佳九月王才宗周令孟王若曰



衛盃（西周中期） 水器 132字



こうぼさくこうふりよこ
侯母作侯父旅壺という壺には出征する夫の永遠の幸福を願う銘文が刻まれている。死なずに生きて帰ってきて欲しいと言っているのである。この壺の銘文によって周代になってはじめて人間味あふれる社会が到來したことがわかる。

「侯母作、侯父戎登、用征行、用求副無彊」
(侯母作、侯父戎に登り、用いて征行す、用いて福の限り無きを求む。) このあと人間とは何か、生きるとは何かを考える諸子百家の生まれた春秋戦国へと時代は移るのである。



もうこうてい
毛公鼎（西周後期・前827頃？）

周代金文の最高傑作といわれる。周王が家臣毛公に与えた鼎。高さ53.8cm 径47.9cm 重さ34.7kg。周王が毛公に下した指示が書かれている(32行・497字)
社会の乱れを汝の努力で解決せよと、周王は国の亂れを嘆き、毛公に命じて礼の國を復活させようとした。
「天下の動向を明察して余の在位を揺るぎなきを旨とせよ」



王曰父不顯文武皇天引

そおうあんかんてい
楚王アンカン鼎

(春秋時代末・楚の通行体)

乙器 蓋銘 刻銘

東周金文（列国金文）地方色が濃く雑多である。



しんこう
秦公キ（春秋時代・秦の銘文）



らんしょふ
欒書缶（春秋時代・晋）
金象嵌 器銘

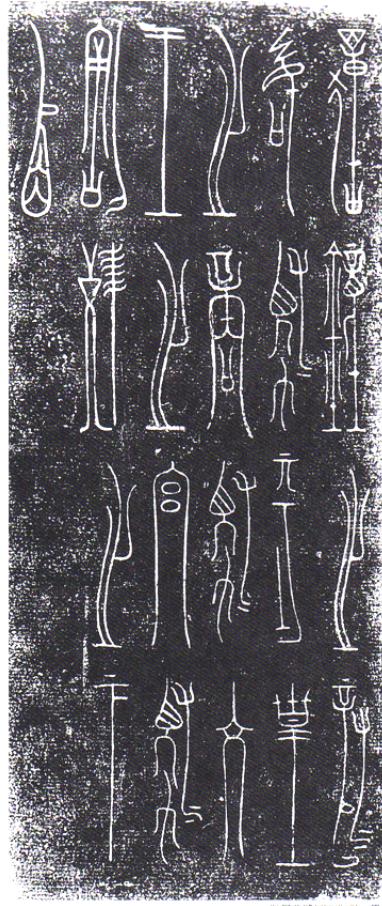


蓋銘

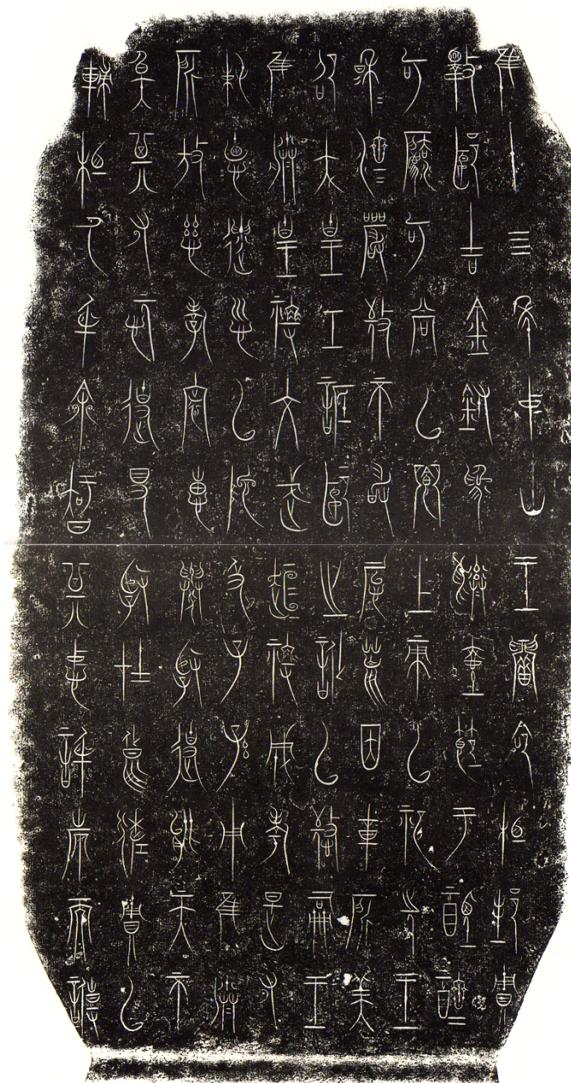


えつおうこうせん どつけん
越王勾践の銅劍（春秋時代末）
ちょう しょたい 「鳥書体」また「鳥篆」
ちょうでん ちようちゅうでん 「鳥虫篆」という。





そうこういつへんしょう
曾侯乙編鐘（戦国時代前期）
曾国の銅器。64個の鐘の銘文（鳥虫篆風）



ちゅうざんおうさくほうこ
中山王サク方壺（戦国時代中期・前314）
ちゅうざん
中山国の銅器。刻銘。筆で下書きして刻したと思われる。



がくくんけいせつ
鄂君啓節（戦国時代中期・前323・楚）
金象嵌。楚国が鄂君啓に与えた
通行手形（符節）である。

しんかん
秦漢金文（前 221～紀元 219）

鉄器の質が向上し石が彫りやすくなり、文字の中心は石碑に移行する。

青銅器は分銅や升などの日用品に使われるようになる。

銅鏡（前漢）鏡銘 小篆



「重圓文銘鏡」

秦代の半両銭



「半両」の文字が見える

かりとう
嘉量（新） 表面に 216 字の銘がある。小篆。



かりょうめい
嘉量銘（新の金文「王莽の詔書」）



けんめい りょうめい
權銘と量銘（合わせて權量銘という）

重量の基準を示す道具として、重さは「權」という分銅、容積は「量」という升が作られた。小篆の詔文が
鋳造されている。全国に頒布された。形状・材質はさまざまなものがある。

「權銘」秦（前 221） 鋸銘 小篆



「秦量」



にじゅうろくねんみことのりけんりょうめい
「廿六年詔權量銘」 全文 40 字

天下統一と度量衡統一の事実のみを簡潔に示す。

白文（旧字体）

廿六年。皇帝盡并兼天下。諸侯黔首大安。立號爲皇帝。乃詔丞相狀綰。灋（法）度量則。不壹歎疑者。皆明壹之。

書き下し文（新字体）

廿六年、皇帝尽こごとく天下を并へいせん兼けんし、諸侯黔首大ほんしゆいに安んず。号なまわを立て皇帝と為すす。乃ち丞相状綰に詔じょうして、法度量の則じゆりょう、壹いつならずして歎疑じとうぎなる者は、皆明らかに之を壹いつにせしむ。

口語訳

(始皇帝の)二十六年、皇帝はことごとく天下を統一し、諸侯や人民は大いに安らかとなつた。王号を立てて「皇帝」と称した。そこで丞相の隣状と王綰に詔し、度量衡の制度が統一されず疑わしいものは、みなこれを明らかにして統一させた。